ー８　託麻新四国八十八ヶ所めぐりにみる歴史的風致

（１）はじめに



神園山・小山山周辺（北から）
手前に白川、右手に九州自動車道を望む

熊本市東部には平地が広がるが、北東部には小山山（おやまやま）、神園山（こうぞのやま）、戸島山（としまやま）の通称託麻三山（たくまさんざん）が存在する。この地域は水に乏しく、明治初頭には湧水のある託麻三山周辺の限られた地域にのみ集落が存在した。しかし明治以降になると開発が進み、現在も住宅域は拡大しており、県内でも有数の住宅地となっている。

託麻三山は阿蘇神話にも登場し古くから人々に信仰されてきたとされ、神社が多く存在するほか、高僧の伝承なども数多く残っている。このような地域的特色を背景として、託麻三山周辺を巡る託麻新四国八十八ヶ所は大正15年（1926）に地元住民の手によって開設された札所（ふだしょ）である。全国に新四国八十八ヶ所は数多く存在するが、託麻新四国八十八ヶ所は札所それぞれに開設者が存在し、その子孫が所有者として代々守り伝えてきた点が特徴である。開設者は自分の所有地や神社の近くなど思い思いの場所に札所を設置しており、定められた巡礼路は無く、巡礼者は域内にある多くの神社や寺を参拝しながら巡礼する。託麻新四国八十八ヶ所巡りは今や地域になくてはならない存在となっている。

（２）託麻新四国八十八ヶ所めぐりに関わる建造物

託麻新四国八十八ヶ所めぐりの札所はそれぞれの札所の所有者が建設しており、木造やコンクリート造、石祠（せきし）、祠を持たないものなど多種多様である。最も多く見られるのはコンクリートブロック造の建造物である。建立年代不明のものが多いが、風化具合や地元住民の証言から、多くは築50年を越えているものと考えられる。所有者の敷地内に設置されることが最も多いが、託麻新四国八十八ヶ所巡りが成立する前から信仰を集めていた場所のそばに設置されることも多い。また、所有者が転居するなどして管理できなくなった場合は、建造物が別の札所近くに移設された例もある。

託麻新四国八十八ヶ所めぐりに決まった巡礼路はないが、ここでは、代表的な巡礼路の順に、主な札所や建造物について記載する。

①小山諏訪神社

小山諏訪神社は承平５年（935）に創建と伝わり、旧小山村の村社であった。社殿は改築されているものの、境内にある壱千年祭記念碑には昭和９年（1934）の千年祭に小山諏訪神社の現社殿が改修されたことが記されおり、昭和９年以前の築造であると考えられる。境内には南北朝時代の正平年間に筑後から肥後北部にかけて活躍した石工藤原助次作の石塔「正平塔」があり、熊本市の指定文化財となっている。

小山諏訪神社の二の鳥居に向かって右手には、薬師如来を祀るコンクリート造の67番札所が位置しており、古くから信仰を集めた小山諏訪神社を意識して建立されたと考えられる。

67番札所に拝礼後、小山山を下り、谷を挟んだ向かいの神園山の34番札所に向かう。



小山諏訪神社





正平塔（右は正平塔の龍の彫刻）

②34 番札所

この札所は四国八十八霊場の34番札所にちなみ種間寺と呼ばれている。かつては託麻新四国八十八カ所の中心的な札所であり、３月21日のお大師さんの祭りでは郡を越えて参拝者が訪れており、芳名板には山本郡や菊池郡の地名が書かれている。札所は託麻新四国八十八カ所開設の大正15年（1926）に建築されたとされ、札所内の鈴や道標寄附の芳名板には古いもので昭和８年（1933）の記述が認められる。



34 番札所

かつてのお大師さんの祭りでは広場に40～50人が輪になって、長い大数珠を手にもって般若心経を唱えながら数珠を手繰る百万べんが行われていた。現在その祭りは行われていないが、大数珠は現在も札所内に安置されている。次に神園山の南側に位置する立江寺に向かう。

③19 番札所（八十八ヶ所設立の地）

19番札所は託麻新四国八十八ヶ所設立の中心人物であった上野富八氏が開設したことから、託麻新四国八十八ヶ所の設立の地とされており、木造のお堂の中に大正15年（1926）建立と刻まれた地蔵菩薩が鎮座している。



19 番札所

この地には、四国八十八ヶ所19番札所にあやかって上野氏によって開かれた立江寺があるが、中世には熊本を代表する禅僧であり、託麻三山周辺にも多くの伝承が残る大智禅師によって西福寺が開かれた場所とされ、現在も絶えることなく万病に効くとされる清水が湧き出ている不動岩が残っている。また、所有者が管理できなくなったりした札所を立江寺が引き受けていたため、現在は19番札所のほかに44番、64番、69番、74番札所が立江寺に集まっている。立江寺の裏には広場があり、託麻新四国八十八ヶ所設立の記念碑や、昭和11年（1936）に作られた設立10周年記念修行大師像がある。そのため、八十八ヶ所巡りで必ず立ち寄る場となっている。



設立 10 周年記念修行大師像

大師像の周りで般若心経を唱え、最も札所が密集する神園山南西の集落内の札所を参拝したあとに神園山の西に位置する桜井硯ケ池に向かう。

④桜井硯ケ池



桜井硯ケ池

桜井硯ヶ池は託麻三山における弘法大師伝説の発祥の地である。池底は泥板岩でできており、層状に剥離して、池の形状が硯のような長方形になっているため硯ヶ池と呼ばれている。池に向かって右には近年建て替えられた大師堂があり、地元の人から奥の院と呼ばれており、大師信仰の中心地であったことがうかがえる。

この池の水は上水道が敷設する前までは生活用水として利水され、人々の生活を支えてきた。周辺住民にとって身近な欠かすことのできない文化遺産である。現在では「熊本水遺産」にも選定されている。

また、後述する弘法大師伝説から硯ヶ池の名前と当該地の字である桜井が名づけられており、明治初期の村図にも桜井の地名があることから、少なくとも江戸時代には硯ヶ池は存在したものと思われる。

桜井硯ヶ池をあとにし、神園山と小山山の周囲に広がる札所を時計回りに巡り、小山山山中に残る古道を抜け、小山山南東に位置する楳谷寺を目指す。

⑤宝積山楳谷寺



楳谷寺

『肥後國誌』には大智禅師によって正平年間（1346～1370）に建立されたと伝わる古刹である。札所とはなっていないものの、八十八ヶ所巡りの際には境内でお接待が行われるなど、八十八ヶ所巡りに縁の深い寺である。

現在の楳谷寺は江戸時代の正保２年（1645）、現在の熊本市中央区細工町の宗禅寺２世明室察の開山である。境内には南北朝時代の五輪塔の残欠や天文７年（1538）銘の宝篋印塔残欠が存在しており正平年間に設立された寺があったものと思われる。



楳谷寺薬師堂

現在の本堂は建設の際の芳名板によると昭和12年（1938）の建立である。境内西部の納骨堂隣には歴代住職墓があり、江戸期再興以降の住職が眠っている。また、本堂の東隣には新しい小さな薬師堂が建っており、堂内には薬師三尊が祀られ、護法神である十二神将像が左右に６躯ずつ整列している。熊本市内で近世以前の十二神将が残るのは数箇所のみであり貴重である。この薬師堂は、元々楳谷寺背後の小山山の中腹にあり奥の院と呼ばれていたが、管理上の問題や参拝者の高齢化といったこともあり楳谷寺境内まで移動してきたものである。元の薬師堂は江戸時代からあったとされ、新しい薬師堂にも一部部材が用いられている。場所は変わったものの薬師堂の行事は以前と変わらずに行われている。

次に南に約２㎞ほど離れた戸島山周辺の札所を目指す。

⑥戸島山奥ノ院大師堂（15 番札所）

戸島山奥ノ院大師堂は戸島山の中腹に位置し、大正８年(1919)に地元有志が弘法大師の御利益にあやかろうと勧請した大師堂である。大正15年（1926）には託麻新四国八十八カ所霊場の開設に合わせて大師堂の側に託麻新四国八十八ヶ所巡りの15番札所を設け、札所の１つとなった。現在の建物は、寄進者の芳名板から昭和38年(1963)に建立されたものであることがわかる。



戸島山奥ノ院大師堂



15 番札所

⑦戸島神社



戸島神社

戸島神社は15番札所の東約50mに位置する旧戸島村の村社である。社殿内の明治９年(1888)の寄附覚書には熊野宮を戸島神社と改めたことが書かれており、もともとは熊野宮であったことと、明治時代からの社殿が残っていることがわかる。そのため、参道中の鳥居の額には「熊野宮」と刻まれている。拝殿の壁は、濡れ縁を釣り上げたものであり、大祭などで人が多く集まるときや神楽が奉納されるときには壁を倒し、拝殿が広くなるよう仕掛けが施されている。

戸島神社は託麻新四国八十八カ所を巡る際、必ず通る場所であり、巡礼者は神社に詣でたあとに広い境内で疲れを癒す。

最後に戸島山の南に位置する札所を巡り、小山諏訪神社に戻り、現在酪農の伝染病対策などのため立ち入ることのできない２つの札所の写真を前に拝し、巡礼は終了となる。

（３）託麻新四国八十八ヶ所巡りにみる地域の特色

明治以降の都市化のなかで住宅域は拡大し、熊本市東部ではその多くが住宅地となっている。一方で、明治初期に作製された『肥後国郡村誌』を見ると、託麻三山周辺の道は、現在の道と大きく変わりはなく、地割をそのままに土地の用途が変わってきたことがわかる。

託麻新四国八十八ヶ所巡りの舞台である託麻三山周辺の神園・小山・平山・石原・戸島・長嶺などの地区は自然も多く残る一方で着々と住宅化が進んでいる地域でもある。住宅は築 100 年を越えるような農家の傍らに新築住宅が建ち並び、新旧入り乱れた様子を呈し、国道沿いには大型の店舗が立ち並んでいる。託麻新四国八十八ヶ所巡りに定まった巡礼順はないが、巡礼の際には必ず住宅地と自然豊かな山林や湧水地の側を通ることになり、自然と都市、過去と現在を感じる巡礼となる。



住宅街にある札所巡礼



山林にある札所巡礼

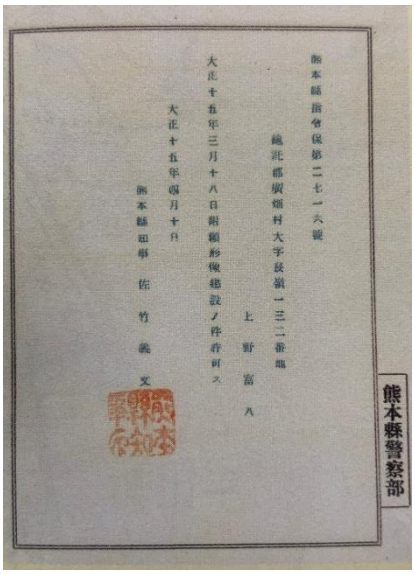
（４）託麻新四国八十八ヶ所巡り

①札所開設の原点

託麻三山地域には古くより弘法大師伝説が存在している。伝説の概要は以下の通りである。

> *ある日、旅の僧が神園山で道に迷い、麓の民家に泊めてもらい親切な接待を受けた。翌朝、旅の僧は家のものが白川まで水汲みに行くのを見て、この地が水に不自由していることを悟り、持っていた桜の木の杖で地面をついた。すると清水が湧き、小さな池が出来た。住民たちは旅の僧が弘法大師に違いないと考え、この地を桜井と名づけ、池の形が硯のようだったため池を硯ヶ池と呼び、大師堂を建てて代々祀った。*

小山山の麓に生まれた上野富八氏は、この伝説で僧を泊めたとされる家の子孫にあたる。氏は幼少のころ体が弱かったため、病気が治るよう桜井硯ヶ池の隣の奥の院大師堂に毎日通って祈願していた。すると、信仰の甲斐あってか病気が全快したため、大師のおかげに違いないと信じ、大師の恩に報いるため託麻三山一帯に八十八ヶ所の札所開設を誓った。氏が中心となり、30年ほど掛けて地域の11名の世話人と共に八十八ヶ所札所を建設する協力者を募った。また四国にも赴き、四国八十八ヶ所全ての寺に許可を取り、札所を設置することにつ


熊本縣警察部

札所設置の許可書

いて熊本県知事の許可をとり、大正15年（1926）に開設にこぎつけた。



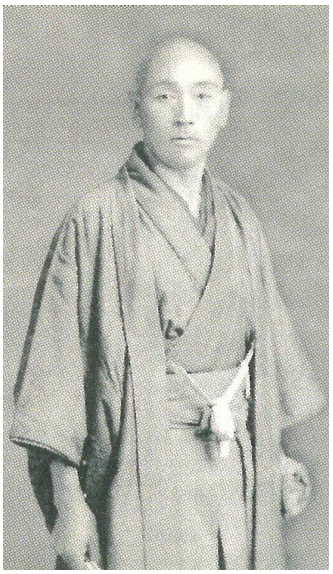
桜井硯ヶ池



奥の院大師堂

②保存会の設立

大正15年（1926）に発起人16名により八十八ヶ所が開設され、毎年４月に八十八箇所巡礼を実施するようになった。昭和40年（1965）ごろまでは地域を挙げての一大イベントであったが、昭和45年(1970)に託麻村が熊本市と合併したことや、保存会のメンバーの高齢化もあり次第に勢いは衰えていった。それでも個々人の活動として巡礼は続けられ、昭和62年（1987）に所有者を中心に新たに「託麻新四国八十八ヶ所保存会」が設立され、さらに平成24年（2012）には地元有志を中心とした「たくま八十八ヶ所巡り実行委員会」が設立され、巡礼の中心的な役割を担っている。



上野富八氏

（個人蔵）

③託麻新四国八十八ヶ所札所の特徴

札所の石造物や建造物は県の許可を得て作られたが、それぞれの札所は協力者が所有者・管理者となり、それぞれ自費で建立されている。託麻新四国八十八ヶ所の設立に際しては、四国八十八ヶ所の本尊と託麻新四国八十八ヶ所の石仏を一致させている。各協力者にはそれぞれ信仰したい本尊があったが、揉めることの無い様、くじ引きで札所番号が決められた。そのため、託麻新四国八十八ヶ所の札所番号は順番に並んでおらず、「お遍路」の定まった道は示されていない。

④託麻新四国八十八ヶ所めぐりの所作

開設当初は金剛杖（こんごうつえ）を片手に持って首に数珠を巻き、白衣を着て集団で巡礼していたが、現在服装に決まりはない。

現在は４月の第１土曜日に行われる集団での巡礼は、小山諏訪神社境内に集まり、巡礼時の注意点や巡礼方法を伝え、託麻新四国八十八ヶ所設立の地である立江寺へ出発する。途中の札所で読経をあげながら、立江寺に着くと、札所とは別に修行大師像の前で般若心経があげられる。



大師像前での読経

立江寺をあとにすると、巡礼はおおよそ神園山周辺、小山山周辺、戸島山周辺の順で実施される。また、八十八ヶ所の札所には含まれないが必ず順路に組み込まれるものに神園山中腹の桜井硯ヶ池と奥ノ院大師堂がある。ここは弘法大師伝説の地であり、託麻三山地域における弘法大師信仰の中心だった。過去には大師堂の祭りに合わせて神園山周辺の札所めぐりをしていたとも伝わっている。

集団巡礼には地域や所有者の協力も欠かせない。巡礼の前は所有者や有志のボランティアによって札所の清掃や、山道の整備が行われる。巡礼の際には多くの人々が集まって移動するが道路は狭いため誘導も欠かせない。さらに札所によってはお参りが済むとお茶やお菓子、漬物などのお接待が準備されていることがあり、巡礼者は山道での疲れを癒す。特に楳谷寺では甘茶の接待のほか、宝物の公開を行っている。



巡礼の様子



実行委員会による誘導



棟谷寺の甘茶のお接待の様子



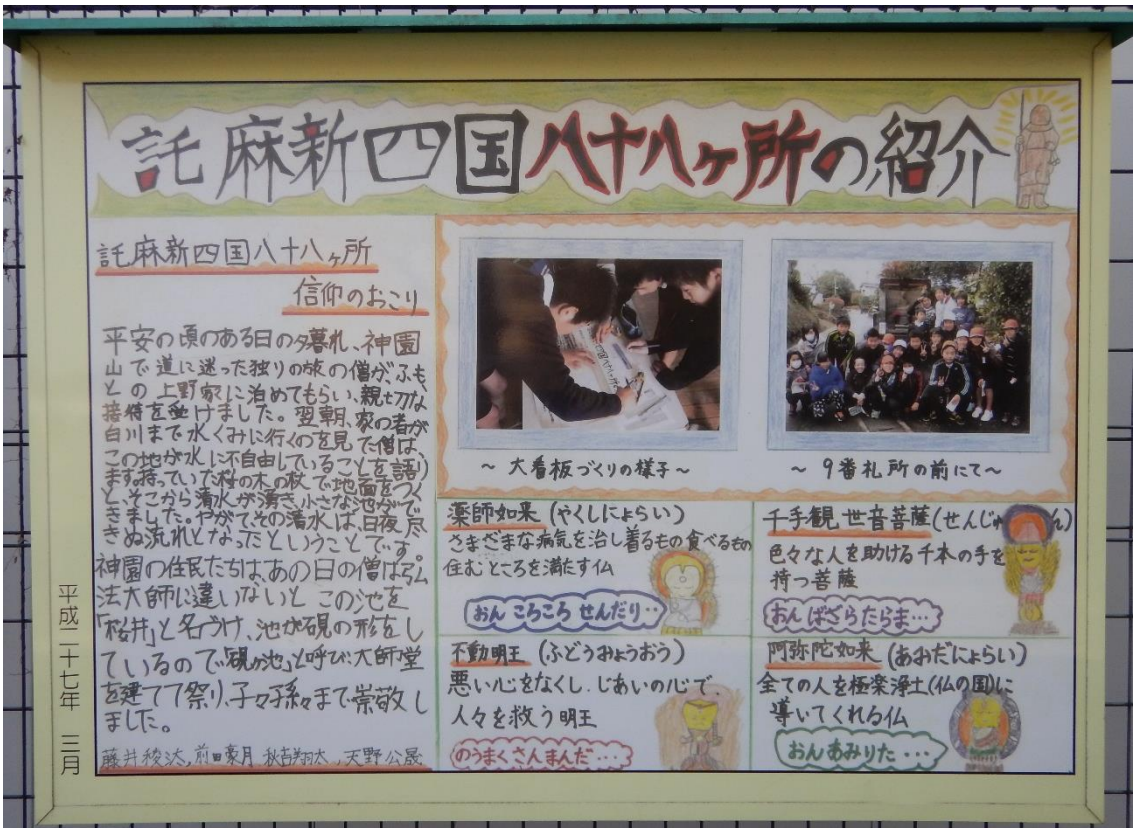
札所でのお接待の一例（自家製の漬物と飲み物）

⑤札所の活用

託麻三山地域では託麻新四国八十八ヶ所の札所を活用した史跡巡りなどのイベントが活発に行われている。特に史跡巡りウォーキング・ランニングは人気で、若い世代が託麻新四国八十八ヶ所に触れるきっかけとなっている。ほかにも、地元の小学校では地域学習で託麻新四国八十八ヶ所を巡ったり、それぞれに祀られている本尊についての学習を行ったりしている。



札所活用の一例

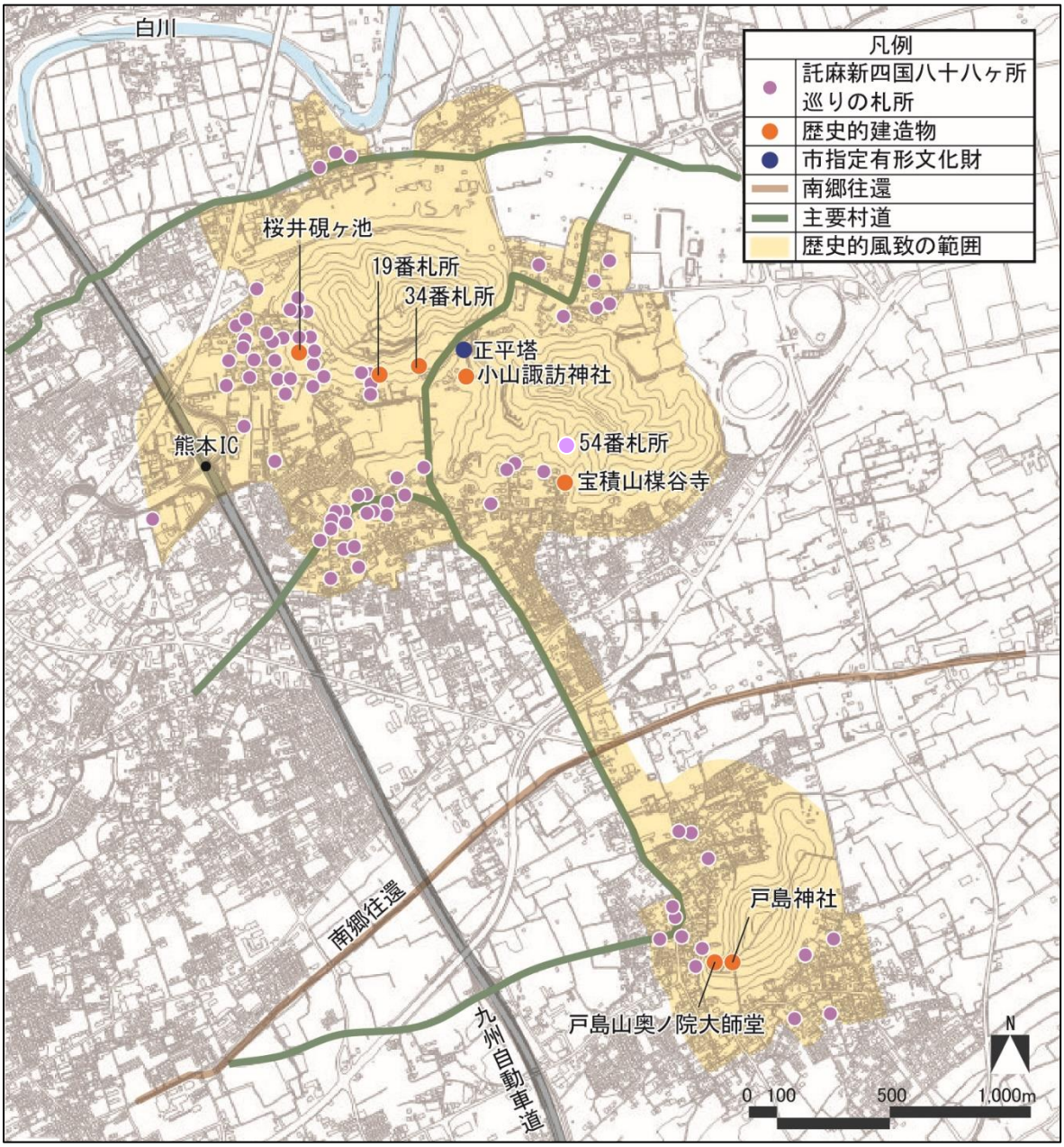


地元小学校の託麻新四国八十八ヶ所巡りについての地域学習の成果

（５）まとめ

熊本市の東部に位置する託麻三山はそれぞれが霊場として住民の信仰を集め、多くの社寺が築かれた。この地域は熊本市でも戦後特に宅地化が進行した地域であるものの、託麻三山周辺の町割りはそのまま残されている。また、数多くの寺院や神社、お堂など歴史的建造物も残るなど、郷土に残る歴史を感じることができる地区となっている。

託麻新四国八十八ヶ所は長く伝えてきた伝承・伝説を元に地元住民が一丸となって開いた霊場であり、その札所は、多くの歴史的建造物とともに地元住民の手によって継承されてきた。このような札所を含めた歴史的建造物が、周辺の自然環境や託麻新四国八十八ヶ所巡りといった活動とともに残されており、この地域特有の歴史的風致を形成している。



託麻新四国八十八ヶ所巡りにみる歴史的風致の範囲

［コラム］

○託麻三山の神話

健磐龍命（たけいわたつのみこと）が草部から阿蘇に向かう途中、阿蘇外輪山から西を見るとカルデラの中に巨大な湖があった。健磐龍命はその広さに感心し、湖水を抜くことで広大な農地を作り出すことを思い立った。そこで湖水の水を流すために外輪山の西側を蹴り破ったものの、その際に尻餅をついてしまい、「もう立てぬ」といったことから、この地は立野（たての）と呼ばれるようになった。蹴り破った箇所からは西に向かって流れ出てカルデラには見事な平地が誕生した。一方、流れ出た湖水は西へ西へと流れるが、蹴り破った山灰が溜まって小山山、神園山、戸島山の託麻三山ができたと伝わる。



左：小山山　右：神園山



戸島山

○大智禅師伝説

大智は正応３年（1290）に現在の熊本県宇城市不知火町（うきしらぬいまち）に生まれ、熊本市南区川尻の大慈寺（だいじじ）の開祖寒巌義尹（かんがんぎいん）に師事した。幼少時から聡明であり、寒巌義尹の死後は鎌倉の建長寺などを訪れ、正和３年（1314）には中国（元）に渡り修行に務めた。しかし「学ぶに足る人無し」と感じ帰国した。帰国後も修行を続け、加賀国（石川県）に祇陀寺（ぎだじ）、肥後国に聖護寺（しょうごじ）を建立し、ついには当時の肥後国北部で大きな勢力を誇っていた菊池氏の帰依を受けて廣福寺（こうふくじ）を建立し、菊池一族に大きな精神的影響を与えた。熊本周辺には大智伝説が多く残るが、特に託麻三山では大智による建立と伝わる楳谷寺や西福寺跡、円通寺（えんつうじ）跡があるほか、修行をしたとされる座禅石（54 番札所）などの遺跡が残っている。



大智禅師の座禅石
（石の上の不動明王は 54 番札所）